歴史まちづくりにおける
街並の構成と真正性イメージ

平野 勝也[1]・高橋 恵理[2]・白柳 洋俊[3]

[1]正会員　工博　東北大学 災害科学国際研究所　准教授
（〒980-8579宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉6-3-09,hirano@plan.civil.tohoku.ac.jp)
[2]正会員　情報修　新潟県 村上地域振興局
（〒958-8585新潟県村上市田端町6-25,takahashi.eri2@pref.niigata.lg.jp)
[3]学生会員　情報修　東北大学大学院 情報科学研究科　博士後期課程
（〒980-8579宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉6-3-09,shirayanagi@plan.civil.tohoku.ac.jp）

地方都市が個性あるまちづくりによって活気を取り戻すため，歴史的な建造物や街並を保存し活用する歴史まちづくりは有効な手法の一つである。その際，多くの街はその資源となる歴史的建造物が僅かにしか残っておらず，新たな建造物を挿入することで街並を修景していく必要がある。しかし，新規建築物により街並全体がテーマパークの様な偽物だと感じたりすることがあるように，歴史まちづくりにおける街並の修景方法には課題が多い。そこで，本研究では，歴史まちづくりにおける本物らしさ，すなわち真正性を担保した街並の修景方法を探るため，個々の建築物の組合せが街並全体の評価に与える影響を捉えるため印象評価を行った。その結果，個々の建築物の組み合わせに起因する相乗効果により，街並の真正性イメージが変化することを明らかした。

Key Words : *authenticity, historical streetscape, the historic buildings in the Japanese style*

1.　はじめに

(1)　背景と目的

地方都市が個性あるまちづくりによって活気を取り戻そうと方法を模索するなか，歴史的な建造物や街並を保存し，活用する「歴史まちづくり」は有効な手法の一つとして認識されている。例えば，重要伝統的建造物群保存地区（以下，重伝建地区）に指定されている地域は，その歴史的資源に豊富な資源を生かし，まちづくりを行っている。

一方，伝統的建造物が微かにしか残っていない地域では，残された資源を保存，活用しつつ，新たな街並を整備する必要がある。例えば，富山県富山市八尾地区では，残された伝統的建造物を核としつつ，その周囲の建造物を伝統的建造物の外観に準ずるように修景することで，街並をより和風に,「本物」らしく感じさせる演出を試みている。しかし，時として伝統的建造物を模した街並が，映画のセットやテーマパークのように「偽物」と感じることがあるように，その修景方法を示すことは難しい。

上述のように，街並がより「本物」らしく，もしくは「偽物」のように感じられることは，伝統的建造物を引き立てる周囲の新規建造物や構成要素の存在によるものであると考えられる。つまり我々は，伝統的建造物とその周囲の建造物の組合せにより，街並の真正性を捉え，街並全体の印象やイメージを形成していると考えられる。

そこで本研究では，印象が異なる個々の建造物の組合せが街並の真正性イメージに影響を与えることを明らかにし，歴史まちづくりにおける新規建築物の修景方法に示唆を得ることを目的とする。

(2)　本研究における真正性の定義

ここで，ベンヤミン[1)]によれば，真正性 (authenticity) とは,「故意または過失による虚偽入力，書き換え，消去及び混合が防止されており，かつ作成の責任の所在を明確にされていること」としている。つまり,「情報や物質に偽りが無く，本物であるということに確実性がある」ことを示している。例えば，世界遺産リストへの登録においては真正性の有無が極めて重要な採択条件となる。

しかし，我々が建造物や街並を感覚的に「本物」もしくは「偽物」であると感じる際，例えば「伝統的様式に忠実である」といった建造物が真正であるとの事実とは別に，日本人が経験上持っていると考えられる「伝統的建造物に対するイメージ」に照らし合わせ，そのイメージとの乖離によって真正性を判断していると考えられる。したがって，本研究では，建造物を見る人自身が「本物」であると感じるイメージを「真正性イメージ」とする。

(3) 研究の位置づけ

歴史まちづくりにおける新規建造物の整備を対象とした研究して，木野勢ら[2)]は，全国 197 地区の歴史的街並の調査により，歴史的街並に存在する新築建築物を歴史的な街並景観の核となる「歴史的建築物」，伝統的様式を踏襲したデザインである「修景型住宅」，新しい要素の付加を許容する「継承型住宅」，和風の意匠を基調とした景観に配慮した「調和型住宅」に分類し，新たに歴史まちづくりを行う自治体の景観形成の方向性に言及している。また，牛谷ら[3)]は，重伝建地区を対象とし，重伝建地区の保存計画と保存対策事業担当者へのアンケートから，伝統的建造物の保存と非伝統的建造物の整備を実態を明らかにすることで，歴史まちづくりにおける街並の保存と創造の関係性に言及している。

これらの研究は，建築様式としての真正性を明らかにしている一方，人の認識における真正性，すなわち真正性イメージには言及していない。

和風建築物における人の認識を対象とした研究として，平野ら[4)]は，和風店舗を対象とし，和風店舗の建築構成要素を分類するとともに，その印象を心理実験により計量した上で，建築構成要素の組合せにより，要素の和風印象の総量以上の和風イメージを店舗に演出することが可能であるを明らかにした。この研究は，人が形成する和風イメージを明らかにした一方で，その真正性イメージについては言及してない。また，個々の要素間の組合せにより形成される店舗イメージの解明にとどまり，個々の建築物の組合せにより形成される街並イメージには言及していない。

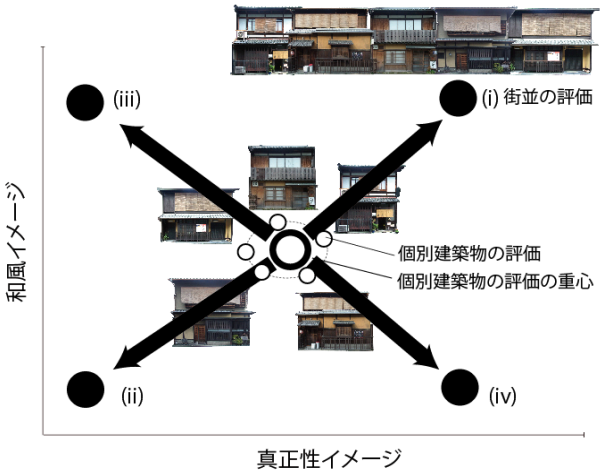
そこで本研究では，和風及び真正性イメージの異なる個々の建築物の組合せによる街並イメージを明らかにすることとする。

(4) 研究の枠組み

さて，我々が街路イメージを形成するとき，建築物の組み合わせ方により街並を評価しているならば，各建築物間の印象の相乗効果が街並の評価に影響を及ぼしていると考えられる。例えば「引き立て役」という言葉のように，当該建築物のみではあまり和風らしさを感じない一方で，それがあることにより周囲の伝統建築物が一層引き立ち，街並全体がより和風らしく感じられることがあろう。このことは，建築物の組み合せによる相乗効果であると考えられる。一方で，個々の建築物の組合せによらず街並を評価しているならば，建築物間の印象の相乗効果が街並の印象に影響を及ぼすことはなく，個別の建築物の評価の重心により街並を評価していると考えられる。

そこで本研究では，刺激画像を用いた印象評価実験により，個別建築物の印象評価の重心と，建築物を組み合わせ作成した街並の印象評価を比較することにより，建築物の組合せによる評価の相乗効果を検証し，街路イメージへの影響を明らかにする。また，その街並イメージは我々の歴史まちづくりにおける街並認識に即し，真正性イメージ及び，和風イメージをもとに取り扱うこととして印象評価実験を行う。

ここで，建築物の組み合わせによる街路イメージの相乗効果は，個別建築物刺激画像の評価の重心と，それら個別建築物を組み合わせた街並刺激画像の評価の変位により検証が可能である (図 1)。例えば，個々の建築物の組合せにより，街並の和風感，真正性がともに強まった場合，和風イメージと真正性イメージのどちらも正の相乗効果が生じていると言える (図 1(i))。また，街並の和風感が弱まり，真正性が強まった場合，和風イメージは負の，真正性イメージは正の相乗効果が生じていると言える (図 1(ii))。さらに，街並の和風感が強まり，真正性が弱まった場合，和風イメージは正の，真正性イメージは負の相乗効果が生じていると言える (図 1(iii))。そして，街並の和風感，真正性がともに弱まった場合，和風イメージと真正性イメージのどちらも負の相乗効果が生じていると言える (図 1(iv))。



図–1 建築物の組み合せによる街並イメージの変化

2. 方法

(1) 準備実験

まずは，単独の建築物画像を選定するため，建築物画像の分類試験を行った。具体的には，京都市内にて，建築物全体が入るようデジタルカメラにて和風建築物を撮影後，木野勢ら[2)]及び平野ら[4)]を参考に,「伝統建築」,「作り物建築」,「和風建築」に基づき 58 画像を選定し，AdobePhotoshopCS5 により建物以外の情報を取り除いた画像を作成した。

評価項目は，真正性イメージ，和風イメージをそれ

ぞれを「作り物感」と,「和風感」により評価することとし，各評価項目ごと，全建築物画像を，その評価の強い順に 6 つのグループに分類する分類試験を行った。その際，和風感の評価に対する経年変化の影響を排除するため,「時間軸を持たない和風イメージの強さで判断」するように教示した。実験参加者は学生 15 名とし，得られた結果をもとに，伝統建築，作り物建築，和風建築の特徴をよく表す画像から 5 軒ずつ選定し，印象評価実験に用いる画像とした。

(2) 印象評価実験

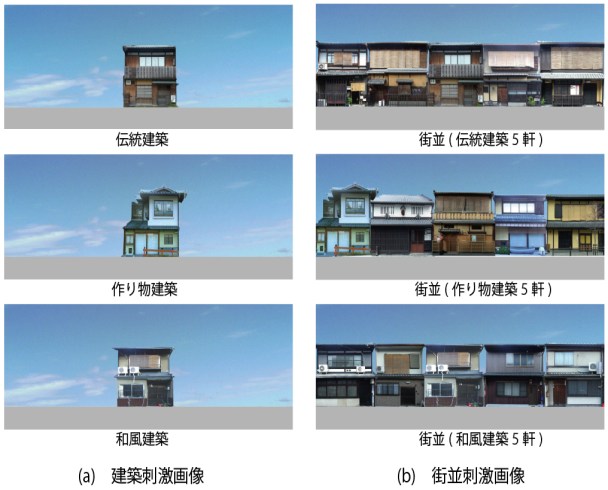
a) 実験参加者

実験参加者は学生 30 名 (男 20 名，女 10 名) であった。

b) 刺激

準備実験により選定した建築物画像に背景を挿入後，840×1200pixel に統一し，計 11 つの建築刺激画像とした (図 2(a))。さらに単独建築画像を 5 つを組み合わせ，同様に 840×1200pixel に統一し，計 11 つの街並刺激画像とした (図 2(b))。

これらの刺激画像は，RGB256 階調，960×1024pixel プロジェクターを用い，実験参加者の約 3m 前方におかれた 90 インチスクリーンに投影された。画像の大きさは，縦約 900mm，横約 1400mm であった。



(a) 建築刺激画像　(b) 街並刺激画像

図–2 刺激画像の一例

c) 評価項目

評価は SD 法によるものとし，真正性イメージの代替指標として「人為的な—自然発生的な」,「作り物な感じ—純正な感じ」,「フェイクらしい—本物らしい」を，また和風イメージの代替指標として「和風感が弱い—和風感が強い」,「軽薄な—風格のある」とし，評価尺度は 11 段階とした。

(3) 手続き

実験参加者は，着席した状態で手元におかれた回答用紙に各刺激画像の評価を記入した。各刺激画像は 30 秒呈示され，その時間内に回答を記入した。なお，各刺激はランダムに呈示された。以上の手順に従い，26(建築刺激画像 [15 種類]，街並刺激画像 [11 種類])×5(真正性評価 [3 種類]，和風評価 [2 種類]) の計 130 項目の回答を求めた。

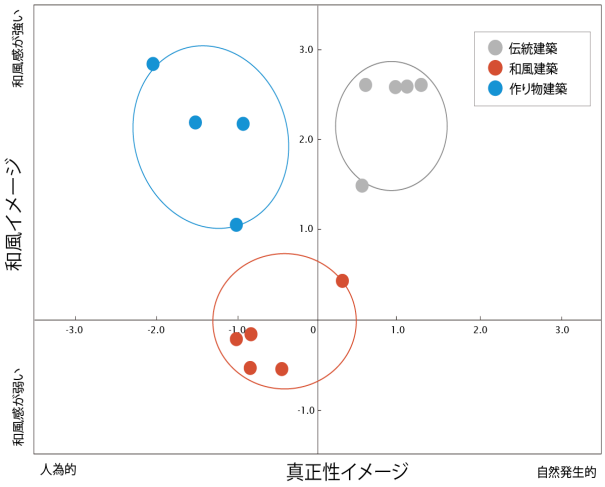
なお，以降簡便のため，各建築刺激画像は伝統建築を D，作り物建築を T，和風建築 W と表記することとする。また，街並刺激画像において，例えば伝統建築 (D) が 4 軒，作り物建築 (T) が 1 軒の組合せだった場合，$D4T1$ と表記することとする。

3. 建築物の印象評価

はじめに，建築刺激画像の印象評価を検証する。本稿では，特に明快な結果を得た「人為的—自然発生的」及び「和風感が弱い—和風感が強い」を真正性イメージ及び和風イメージとして議論することとする。

得られた評価をもとに分散分析を行った。その結果，各建築刺激画像は，真正性イメージ及び和風イメージともに伝統建築，作り物建築，和風建築の 3 種類に有意に分類されることが示された ($F_{真正性}(2, 58) = 62.9, p < .01$, $F_{和風}(2, 58) = 41.7, p < .01$)。

これより，3 種類の建築刺激画像はそれぞれ，伝統建築は和風イメージと真正性イメージが共に強く，作り物建築は和風イメージが強く真正性イメージが弱い，さらに和風建築は和風イメージと真正性イメージが弱くなることが示された (図 3)。



図–3 建築物の印象評価

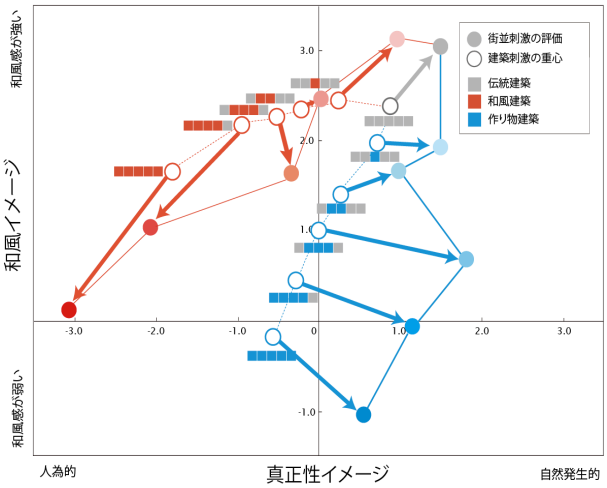
4. 街並の印象評価

つづいて，街並刺激画像の印象評価を検証する。なお，建物刺激画像の印象評価と同様に，真正性イメージを「人為的—自然発生的」，和風イメージを「和風感が強い—和風感が弱い」とする。

(1) 街並の印象評価

得られた結果をもとに分散分析を行った。その結果，各街並刺激画像は，真正性イメージ及び和風イメージともに，伝統建築型，作り物建築型，和風建築型の 3 種類の街並刺激画像の差が有意であった ($F_{真正性}(2,58) = 41.7, p < .01, F_{和風}(2,58) = 62.9, p < .01$)。

つづいて，個々の建築物の組合せが街並イメージに与える相乗効果の検証を行う。そのためにまず，建築物の種類による街並の印象の差異を検証するために，伝統建築を基準に，街並刺激画像の印象評価の差異を検証する。次に，個々の建築物が街並全体の印象へ及ぼす影響，すなわち街並イメージへの建築物の相乗効果を検証するために，街並刺激画像の印象評価と各建物刺激画像の印象評価の重心との差異を検証する。



図–4 街並の印象評価

(2) 伝統建築一作り物建築により構成される街並の印象

a) 街並の印象

和風イメージについては，伝統建築が多いほど，和風感が強い評価となった。同様に，真正性イメージについても，伝統建築が多いほど自然発生的な評価となった。

b) 街並と建築物の重心

建築刺激画像の評価の重心は，和風イメージ，真正性イメージともに，伝統建築が多いほど和風感が強く，自然発生的な評価となった。

また，建築物評価の重心と街並評価の関係については，伝統建築に比べ作り物建築が少ない場合は，建築の重心に比べ街並の和風感が強く ($F_{D5}(1,174) = 6.57, p < .05/F_{D4T1}(1,174) = 6.83, p < .01$)，かつ自然発生的 ($F_{D5}(1,174) = 1.73, n.s./F_{D4T1}(1,174) = 2.42, p < .15$) となる傾向となった。さらに，伝統建築 5 軒の評価の重心よりも D4W1 の評価の方が，和風感が強く，自然発生的である。

一方で，伝統建築に比べ作り物建築が多い場合は，建築の重心に比べ街並の和風感が弱く ($F_{T5}(1,174) = 18.0, p < .01/F_{D1T4}(1,174) = 34.2, p < .01$) かつ，人為的 ($F_{T5}(1,174) = 26.4., p < .01/F_{D1T4}(1,174) = 5.64, p < .05$) となる傾向となった。さらに，作り物建築が増加するほど，建築の重心と街並の評価の乖離が大きくなる傾向となった。

前者に関しては，多数の伝統建築のなかに，作り物建築が存在する際，作り物建築が街並全体に対して，和風イメージ及び，真正性イメージへ正の相乗効果を生むことを示している。

一方，後者に関しては，伝統建築のなかに，作り物建築が多く存在する際，作り物建築が街並全体に対して，和風イメージ及び，真正性イメージへ負の相乗効果を生むことを示している。

このことは，例えば伝統建築が多い地域に建物を新築する際，少量の作り物建物を入れることで，和風イメージ，真正性イメージがともに強い街並のイメージを形成することが可能であることを示唆している。

(3) 伝統建築一和風建築により構成される街並の印象

a) 街並の印象

和風イメージについては，伝統建築が多いほど，和風感が強い評価となった。真正性イメージについては，概ね伝統建築多いほど，自然発生的な評価となった。ただし，$D4W1$ に比べ $D3W2$ はより人為的な評価となる一方で，$D2W3$ はより自然発生的な評価となった。

b) 街並と建築物の重心

建築物評価の重心について，和風イメージ，真正性イメージともに，伝統建築が多いほど和風感が強く，自然発生的な評価となった。

また，建築物の評価の重心と街並の評価との関係については，全ての場合において，建築の重心よりも街並の真正性が自然発生的となった。

一方で，伝統建築が和風建築に比べ少なくなるにつれ，建築の重心に比べ街並の和風感が弱くなり ($F_{T5}(1,174) = 9.93., p < .01/F_{D1T4}(1,174) = 3.26, p < .1$)，和風建築が増加するほど，建築の重心と街並評価の乖離が大きくなる傾向となった。

前者に関しては，伝統建築のなかに，和風建築が存在する際，和風建築が街並全体に対して，真正性イメージへの正の相乗効果を生むことを示している。ただし，

伝統建築よりも和風建築の割合が増えることによる真正性イメージへの影響はない。

一方，後者に関しては，伝統建築のなかに和風建築が存在する場合，和風イメージへ負の相乗効果を生むことを示している。また，和風建築が増えるほど負の相乗効果は大きくなる。

このことは，例えば伝統建築の多い地域に建物を新築する際，少量の和風建築を入れることで，無理をしていない自然発生的な街並だと捉えられ，真正性イメージが強い街並を形成することが可能であることを示唆している。

(4) 街並の印象に与える作り物建築と和風建築の影響の比較

伝統建築に対する，作り物建築及び，和風建築の割合が同じ条件の街並の評価を比較した場合，和風イメージ関しては作り物建築が強く，真正性イメージに関しては和風建築が強い結果になった。また，伝統建築の割合が少なくなるにつれ，和風建築が作り物建築に比べ，より人為的な評価となる傾向が示された。

これは和風イメージに関しては和風建築よりも作り物建築が，また真正性イメージに関しては作り物建築よりも和風建築の方が，それぞれのイメージにおける街並の評価により強く影響を与えることを示す一方，どちらの建築様式による修景が街並全体の評価を高めることになるのかは，一概に言及することが難しいことを示唆している。

5. まとめ

本研究では，歴史まちづくりにおける個々の建築物のイメージが街並全体の評価に与える影響を行った結果，以下の結論を得た。

(a) 伝統的建築物が残る街並における作り物建築はその割合が低い場合，街並の和風イメージ及び真正性イメージに正の相乗効果がある。

(b) 伝統的建築物が残る街並における和風建築はその割合に関わらず，街並の真正性イメージに正の相乗効果がある。

以上のことから，伝統的建造物が残る街並は，伝統的建造物とその間に存在する建築物の組合せに起因する相乗効果により，街並イメージが大きく変化することが明らかとなった。

このことは例えば，和風感の強い街並を目指すのであれば，少量の作り物で修景を行うと街並の和風感が上昇するとともに，街並全体の印象も向上すること，また一方でその割合が増加すると偽物であると認識され，街並の評価全体が下がる可能性が高いため注意が必要であることが示唆している。

また，自然発生的な街並を目指すのであれば，無理に修景を行って作り物と認識される危険性を孕むより，弱い和風を感じる和風建築を間に入れイメージを変化させるほうが，望む評価を得られる街並になるということが示唆している。

これより，歴史まちづくりを目指す各自治体は，和風イメージを強い街並もしくは，真正性イメージが強い街並にするのか，それぞれのまちの現状や整備に対する重要度を踏まえ，歴史まちづくりの方針を決めるべきではあるが，その際，街並の構成により評価が変化することに注意し，まちづくりの方針を決める必要があると言える。

謝辞： 本研究は, 科学研究費補助金基盤 C(一般), 課題番号 22615001, 研究課題名「街並メッセージ論を用いた新たな街並デザイン方法論の確立」の助成を得て行った。

参考文献

1) ヴァルター・ベンヤミン: 複製技術時代の芸術, 晶文社クラシックス, 1999.
2) 平野勝也, 日高良文:和風店舗イメージ形成における統辞論的コードの役割, 景観・デザイン研究論文集, Vol.1, pp.193-202, 2006.
3) 木野勢雄也, 小柳健, 岡崎篤行: 伝統的様式を規範とした継承型住宅の形成と普及 その 1 継承型住宅によって景観形成を測っている歴史的街並の抽出, 日本建築学会北陸支部研究報告集, No.47, pp.340-341, 2004.
4) 牛谷直子, 明智圭子, 増井正哉, 上野邦一: 重要伝統的建造物群保存地区における修景の実態に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, No.561, pp.211-216, 2002.